

## 話し言葉と書き言葉

フリーライター・畑田家住宅活用保存会正会員 日馬 恭代(くさま やすよ)

私は大学卒業後記事を書く仕事、いわゆる「記者」という職業に就いた。そのせいか、文章を読むとつい校正をしてしまう。ひよんなことから京都大学に通う就職活動(就活)中の学生諸君のエントリーシートを添削することになった。京都大学に合格した彼らは相当勉強をしている。だから素晴らしい文章が書けるはず…と、思いきや、そうではなかった。

それは近所に住む京大生の母親のボヤキ節から始まった。「もう 20 社位エントリーシートを出しているけど箸にも棒にもかからない」「京大に入った時点で就職は約束されたと思っていたのに、どうしよう…」

就活の第一関門はエントリーシートの提出。テーマも文字数も決められている。企業はそこでまず篩にかけるわけだが、就活生はこれを突破しないと次のステップに進めない。そんな弱み(?)に付け込んでなのか、エントリーシートの代筆業者や添削業者があるということを知った。

のん気な話だが、「そういえば我が家にも就活生がいたな。しかも同じく京大生だ」と私はふと思った。就職には手出し、口出しをするまいと決めていたため、我が子の就活状況など知る由もなかった。それとなしに息子に聞いてみた。すると息子も同じくエントリーシートが突破できず苦しんでいたというではないか。(絶句…) しかもこちらの方がさらに上手だ。もう 30 社は出したという。

そんなこんなで、新聞記者をしていたスキルを今こそ生かさなければと一念発起。息子と近所の京大生のエントリーシートを添削することに。就活のピーク時は深夜まで作業は続いた。以来、希望する就活生を応援するべく毎年エントリーシートの添削をしている。

彼らが書いている文章にはある共通点があった。それは話し言葉と書き言葉がごちゃ混ぜになっているところ。おまけにおかしな敬語を無理やり挿入している。添削すると、原稿はみるみるうちに赤だらけになった。

正しい言葉をチョイスするには、やはり正しい日本語を知っておいて欲しい。流行語、省略言葉は否定しないが、正しい使い方を知った上で使って欲しいと実感した。

私が新聞記者をやり始めた時、最も苦勞したのが文章の書き出しだった。ややもすれば、ああでこうで、こうだからどうで…と前置きばかりがどんどん膨らみ、結局何が言いたいのを全く伝えられない。京大生のエントリーシートはまさにそれだった。その当時、上司のベテラン記者から教わったテクニックがある。ヒントは 4 コマ漫画に隠れていた。4 コマ漫画は、たった 4 コマで起承転結を表現し、しかもオチまである。様々な 4 コマ漫画を見ているうちに、ある特長に気付いた。それは必ず「起承転結」の順に話を展開させなくても良いと

いうことだった。時には結論から入ることがある。それは新聞の大見出し、小見出しにも共通していた。人の興味をひきつけなくては本文に導入することができない。だから大見出し、小見出しは短い文脈ながらも、結論に近い文言が織り込まれている。この「気付き」以来、多少なりともまともな文章が書けるようになっていったような気がする。

ある就活生はNHKの記者志望。最終の役員面接にたどり着いた時こう言われたという。「君の文章は読ませるよね。もう少し続きを読みたいと思うよ」と。そして「起承転結を意識せず書く技を持っているね」とも言われたそうだ。やがて彼は念願の記者になれた。彼ははじめ、私に添削をされた真っ赤な原稿を見て自信を喪失したという。そんな彼が技をつかんで夢もつかんだのである。

すっかり活字離れしているこのご時世だが、就活生はガッツリ文章を書かなくてはならない。ここで悪戦苦闘をするのなら、常日頃から文字離れをしない生活をする方が楽だと思う。私は就活生には必ず自分の経験談をする。そして「電車の吊り広告、週刊誌の見出しを注意深く見るように」と付け加える。いつもの生活の中で少し注意深く観察するだけで学びのチャンスはいくらでもあるのだということに気付いてくれたらいいなと、ただただ願う。

余談になるが、学生と話をしていて驚きのあまり吹っ飛んだ話がある。最後にそれに触れておこう。近年、学校の授業で板書はスマホで撮影するのが常らしい。授業中、先生は板書の撮影がしやすいように黒板の端に立つという。そして学生達は授業中でもお構いなしにバシャバシャとシャッター音を軽快に鳴らす。

『ノートはどうなっとるんじゃー!』とは私の心の叫びだ。自分の大学時代を振り返ると…体育会系の部活にのめり込み、試合で欠席した授業のノートは飛び飛びの内容。こんなノートをいくら読み返してもさっぱりわからない。試験前にはクラスメイトにペコペコ頭を下げてノートを借りたものだった。コピーしてはノートを返す、の繰り返しだ。試験前は勉強よりノートコピーが忙しかったのを覚えている。コピーが終わると今度はノートに書き写す。典型的なアナログな動きだ。しかし、その作業を繰り返すことで授業内容が自然に脳に刷り込まれ、試験勉強はバッチリ。やはり書くことの重要性を実感する。

さらに驚きはまだ続く… 「ノートコピーが生協で販売されている」らしい。

『コピーもせんのかいっ!』とはまたもや私の心の叫び。  
「ノートコピーが欲しい人」、「ノートを売りたい人」、「ノートを買いたい大学」  
いやはや、この謎のトライアングルには脱帽だ。便利な時代になったものだとため息混じりに感心した。